

陰謀論の構造の提案

-太田龍の著作の記号論的分析から-

学籍番号：71942778、名前：熊川航

目次

第1章：序論

| | |
|-----------------------|----|
| 1.研究背景と主題..... | 4 |
| 2.対象について..... | 5 |
| 3.方法論(方法論の理論的背景)..... | 6 |
| 4.先行研究について..... | 14 |

第2章：分析

| | |
|-------------------|----|
| 1.妥当性についての検討..... | 16 |
| 2.結果..... | 22 |

第3章：まとめ

| | |
|--------------|----|
| 1.考察..... | 26 |
| 2.今後の課題..... | 27 |

| | |
|-----------|----|
| 文末脚注..... | 29 |
|-----------|----|

| | |
|-----------|----|
| 参考文献..... | 31 |
|-----------|----|

要旨

本稿は太田龍という思想家の著作における、陰謀論に近いとされる著作を対象に、物語に多く適応される記号論的な分析を通して陰謀論の構造の提案を試みるものである。ここでは主として、グレマスの行為項モデルを用いた分析を行った。その結果、送り手という物語における秩序の設定者としての存在に、物語の主人公であるはずの存在が位置し、秩序の設定者と、秩序の遂行者の次元の異なる二者が一つの存在に二重に内在してしまうという記号論的に明らかになった。それはつまり物語における秩序の恣意性と、その秩序から疎外される主人公というものが陰謀論的な世界認識につながるということの意味し、絶対的な正当性を持った秩序のなくなったポストモダン的な世界認識と密接に結びついている。このことからグレマスの行為項モデルが陰謀論を分析する一定の妥当性を持ったものとして提案する。

キーワード：

物語論、記号論、陰謀論、太田龍、A.J.グレマス

第1章序論

1.研究背景と主題

後期資本主義、そしてポストモダンにおいて、ジェン=フランソワ・リオタールが『ポストモダンの条件』において言及する「大きな物語」を喪失し、私たちは依拠する「べき」物語を失ったと言うことができる。それは権威的な言説に信頼を置くことができないと言うことを意味し、知識人や専門家、そして科学に対しても彼らの持つような専門的な批判的態度ではなく、政府や権威側からの正しいとされている「大きな物語」の押し付けを拒否、疑う態度が増えてきていると言うことだ。例えば地球温暖化について、それまで権威であったマイケル・マンによって気温変動を明らかにするデータが恣意的に操作された可能性があることが発覚しはじめたホッケースティック論争があり、それによって地球温暖化懐疑論者の台頭をしたとされている。現在、私たちが依拠することのできる言説が失われつつある一方で、非論理的な言説をも間違っていると否定することができない状況にある。それによって陰謀論をはじめとした言説の跋扈に拍車をかけており、これらの現象を「貧者の認知地図」(Fredric Jameson 1988)と呼ばれることもある。これらの信頼することのできる「真実」(truth)というものがなくなってしまう状況において、現代を「ポストトゥルース」と呼ぶ(Lee McIntyre, 2018=2020)。

また、2021年1月の米連邦議会議事堂への襲撃事件が有名だが、選挙結果を改竄したと信じる陰謀論者が実際にこういった犯罪を犯す出来事が起きており、日本においても、コロナ禍において、ワクチン陰謀論を唱えた人々がワクチン会場に侵入し接種を妨害したことで、逮捕される事件が起こった。実際、社会の中での陰謀論の存在感が上がってきていることはメディアなどで数多く取り上げられるようになってきたことから伺うことができるだろう。しかし陰謀論を根拠としてこういった事件が起こっているとされる一方でジョセフ・E・ユージンスキによると実際、陰謀論者の数というのは増えているというデータを得ることは困難であると述べている。(Joseph E. Uscinski, 2020=2022) これは陰謀論ないしは陰謀論者自体を定義することが難しく、陰謀論の存在感が増したとて、陰謀論者の数が増えていると示すことは困難であると考えられる。また、ポストモダンにおいて、SNSをはじめとした現代的なコミュニケーション空間によって、権威的な言説だけではない情報が氾濫し、個々の人々がそれぞれのメディアを介して特定の思想を共有し、確証バイアスによる過激化が生まれているとしている。(Lee McIntyre, 2018)つまり権威的な機関との縦の関係は希薄化し、横の関係が緻密化されてきているということができる。

しかし、日本における陰謀論の研究は欧米、特にアメリカに比べ少なく、物語論から陰謀論にアプローチした研究は(Hydrisko John, 2021)によって QAnon の陰謀論を対象になされている。こちらは修辞論による fortune 概念に注目し protagonist(主人公)と

Antagonist(敵対者)の二項対立図式の提示を行っている。この二項対立の図式は栗田の太田に対する指摘と類似している。このことから太田の思想に対して二項対立図式をさらに発展させ、物語論の理論枠組みから、陰謀論における一定の構造を提案することを目指している。

2.対象について

本研究の対象は太田龍という人物の著作を対象にしていく。太田龍とは本名：栗原 登一とされ、太田竜とも呼ばれている。本稿では太田龍とする。彼は 1930 年に樺太で生まれる。日本の戦後の左翼運動において有名な人物であり、共産党に戦後の 1947 年に入党する。しかし 1953 年に共産党を離党しスターリニズム批判のトロツキストとなり、革命的共産主義同盟の前身となる日本トロツキスト連盟を作る。ハンガリー事件後、一国社会主義を批判したトロツキスト（新左翼）の存在感が増していく中で、太田も一国社会主義を非難し世界革命を主張するようになる。革共同から離脱し、日本の第四インターナショナルを委員長の一人として参加。学生運動をはじめとした 1968 年以降はベトナム戦争、文化大革命などに触発され辺境からの革命を目標に積極的に人々に働きかけていった。思想の大まかな流れとしては、共産主義運動が行き詰まったためその頃の第三世界（辺境）からの革命を意識し（1967 年）『世界革命・革命児ゲバラ―マルクス主義と現代』を出版するも、映画「アイヌの結婚式」をきっかけに、アイヌ解放運動（1972 年）の革命にシフトしていった。その後偽史を用いて日本原住民論（1981 年）や緑の党、地球維新党などの自然保護（1986 年）を展開し、ユダヤ陰謀論（1993 年）、冷戦が終わり、左右の対立軸がなくなるにつれて、対立軸を地球の内と外へとしていく爬虫類陰謀論(2000 年)という流れになっている。太田自身も自ら歴史観について『縄文日本文明一万五千年史序説』で述べており、それが太田にとっての変わっていったということとは自覚していたといえることができる。

戦後において、栗田は研究対象である太田龍が参加していた「共産主義を「陰謀論」に含めて批判する言説も現れ始める」（栗田 2021）と指摘している。つまりマルクスによる共産主義をも一定の陰謀論を持ち得ると考えるのであれば、共産主義者として名を馳せていた時代から彼の思想には一定の陰謀論的な要素は保持され、グレマスによるマルクス主義を分析する方法を陰謀論に適応することができると言えるだろう。本稿ではこの理論的枠組みから分析を試みる。

3.方法論(方法論の理論的背景)

本稿では構造主義的な立場から物語の分析を行うナラティブ分析を行う。ここでの構造主義とはソシュール、レヴィ・ストロースをはじめとした言語、ないしは文化を構造の体系から説明しようとする立場であり、その系譜にグレマスは存在している。この言語学から派生した考え方は20世紀初めから進行してきたとされ、その思想的潮流のことをローティは言語論的転回と呼んだ。この転回以前は「事物＝モノ」という定式が当たり前とされていた。物自体はそこに存在しているとされていた。もちろん、現在もその考え方は強く残っている。しかし20世紀初頭、ヴィトゲンシュタインが世界は事物の総体ではなく、事実の総体、つまり言語によって築かれたものであって、その実体は言語なしには存在しないと書いた。(高田, 2010)では金の例を出してこの実態を説明する。金というものは、昔は価値があるものとは考えられていなかった。しかしそれが、18世紀中頃から、服飾品に多用されるようになり、現状に至る。金自体が何か実質的な価値を産んだわけではなく、金を「美しい」と考えた人がその価値を創出した。そこに実利的な価値は必要ない。金は美しいとするから、美しく感じるのである。物体それ自体には意味がなくとも、それを言語体系に組み込むことによってその物質的条件から離れた意味をも付与することができる。つまり、事物を私たちは言語なしに理解することはなく、その言葉によって形成されたものとして世界を認識する。言葉によって紡がれた世界、つまり物語として認識するのだ。私たちはただAがBであると教えられるのではなく、理由や歴史からそれらを理解する。その理由や歴史こそが、言語において何に価値があるとされているかを反映する物語なのだ。その物語の構造を理解することが、私たちの認識を理解することにつながるのである。この前提から20世紀の構造主義者たちは文化や神話、物語を分析するようになった。どのように私たちは世界を認識しているのか、どう認識させようとしているのか、どのような認識をするべきかと。

これらの系譜を受け継いだ一人がフランスの言語学者であるアルジルダス・ジュリアン・グレマスである。グレマスはこの構造主義的な立場からの潮流を受け継いだ人物である。特にこの構造主義的に物語を分析する立場はロシア・フォルマニズムの影響が大きいとされている。ロシアフォルマニズムとはロシア形式主義とも呼ばれ、その名の通り、形式に注目し、構造主義的な立場から文芸批評をおこなう立場である。後述するプロップやヤーコブソンはロシア出身ではあるものの、レヴィ・ストロースや E.スーリオと並行して神話や昔話、演劇を分析していた。それらの研究の蓄積から、グレマス物語の構造を明らかにする手法を発展させた。彼が特に注目するウラジーミル・プロップは、ロシアにおける魔法昔話を登場人物の機能(行為)ないしは役割の観点から分析し、その物語には類似した登場人物や、類似した出来事が繰り返し登場することから、それらをパターン化することで、魔法昔話の全体に一貫する構造を明らかにすることを試みた。プロップは(高田, 2010)でも述べられているように、その機能を計 31 の機能(行為)¹⁾に分類した。さらに物語

における機能の分類から、7つの登場人物の類型化を行い、そのそれぞれの登場人物の「行動領域」¹に31の機能を分類した。これらの結果、そのロシアの魔法昔話を7つの行為項と31の機能(行為)の組み合わせによって作り上げられる構造を抽出したとされている。

さらにフランスにおいて、E.スーリオによる演劇による分析があり、この分析にもグレマスは注目する。『二十万の演劇状況』においてスーリオは、プロップによる行為項と類似した概念を用いて、演劇を、6つの行為項ⁱⁱを記号化しそれぞれの登場人物に記号を付与することで演劇を分類した。(Greimas 1966=1988)

昔話と演劇を同列にして語られるのに関しては双方とも行為項概念を用いて分析がなされていることから、この行為項概念が昔話だけではなく、演劇にも適応できることを示している。これらの系譜から、グレマスはこのプロップとスーリオを例にとりながら、フランスの言語学者であるリュシアン・テニエールの提案を採用する。

「われわれは—彼自身は、おそらく教育的配慮しか頭になかったのであろうが—基本的な言表を[芝居の]場面にひき比べたテニエールの着目に驚いたことを既に述べた…。伝統的な統辞論によると、機能…は語によって演じられる役割—そこでは主語は<行動を起こす誰か>で、目的語は<行動を受ける誰か>、など—にすぎないことを思い起こすならば、節(proposition)はそのような考え方からすれば、事実、ホモ・ロクエンス[言葉を話す人]が自分自身のために演じる一つの場面に他ならない。しかしその場面にはそれ独特のものがある。それは場面が永続的であるということである。アクションの内容は絶えず変化し、役者も変わるが、場面=言表…は常に同じものである。なぜならその永続性は、役割の配分が常に決まっていることによって保証されているからである」(Greimas 1966=1988. 224-225)

「統辞的なはたらきは、一つの過程、幾人かの演技者、それに多かれ少なかれ周囲を取り巻いている一つの状況…を含む同じ小さな場面を、その都度数百万という数で再生産するが、そのはたらきはおそらく本物に似せて作られたものであって<現実の>世界における事象の存在の仕方には対応していない。それでも、言語の象徴体系のおかげで、われわれがこのようにして統辞規則を用いて目の前で展開させる、世界についてのわれわれの視像(ヴィジョン)とその視像をわれわれなりに組織化するそのやり方—その二つだけが可能なのだが—であることに変わりはない。」(Greimas 1966=1988.153)

「まさしくここに、その全体として捉えられるには大きすぎる意味世界を人間にとって近づきやすい小世界に組織するための、可能な原理の一つとして考察された行為項モデル

¹ こちらの言葉はプロップ独自の用語であり、31の機能は7人の登場人物それぞれに対応して分類され、その登場人物に割り当てられたいくつかの機能を総合して、その人物の行動領域と呼ぶ。

という仮説の出てくる事情が見られる」(Greimas 1966=1988.225)

グレマスの行為項モデルはプロップのいう機能(行為)とは違い、行為項と呼ばれる行為者から出発する。物語の中で役割を体現している具体的な登場人物—グレマスはこれらを「演技者」と呼ぶのであるが—を抽象化し、モデルの一要素として区別するために行為項と呼ぶのである。

「…演技者は一つの発言=民話の内部で制定できるとしても、演技者のクラスで垂直行為項の方は全ての民話からなる資料隊によってしか制定できないという結果が出てくる。つまり演技者の文節は、一つの個別的な民話…を構成し、行為項の構造は一つのジャンルを構成する。従って、行為項は演技者に対してメタ言語的なステイタスを持っている。ただし、行為項は完成された機能分析を、つまり完成された行動範囲の構成を前提としている。」(Greimas 1966=1988. 226-227)

これらの説明をパラフレーズすると、ある物語、ある、さまざまな行動、登場人物(演技者)によって構成されているが、それらの演技者の関係性は役割の配分という形で固定化されている。それらは永続的であり、これらの関係性を統辞規則から組織化し、小世界を構成することができる。この小世界こそが行為項モデルという仮説であり、これらがさまざまなシーンを含んだ物語としてではなく、それらからメタ言語的なステイタスとして、その物語、ないしは物語群に共通する構造を抽出し、機能分析をすることができるということである。

さらにここを出発点としてプロップの「昔話の形態学」とスーリオの「二十万の演劇状況」の役割目録による機能的アプローチと自身による統辞論的なアプローチの両者の比較から三対の行為項カテゴリーを抽出する。

「統辞論から借りたこの行為項モデルと、意味論的な新しいステイタスに合わせ、また小世界の新しい次元に合わせるためには、実際の秩序に属する二つの手直しが引き続き必要であった。一方では、統辞論的行為項を意味論的ステイタスに還元することを考慮に入れること(マリーは、手紙を受け取ろうと、あるいは誰かが彼女に手紙を送ろうと、常に<受け手>である)、他方では、一つの資料体の内部で表出され、その散布状態がどうであれ、ただ一つの意味論的行為項に付与された全ての機能を統合することである。それは表出されたそれぞれの行為項が、背後に行為項固有の意味の充ちをもちうるようになるためであり、また行為項間関係がどのようなものであれ、確認された行為項の集合が表出全体を概評するものだといえるためである。」(Greimas 1966=1988. 225)

(i) 行為項カテゴリー<主体>vs<客体>

| | | | |
|------|-----------------|----|-------------------------------|
| 統辞論 | 主体 | vs | 客体 |
| プロップ | 主人公 | vs | 探し求められる人物 |
| スーリオ | 一定の方向を与えられた主題の力 | vs | 望まれた善の代表者であり、一定の方向をあたえる価値の代表者 |

図1 (Greimas,1966=1988 より筆者作成)

「目的論的關係がこの意味素結合の結果、意味効果<願望>と実現する語彙素として現れると考えることができる。もしそうだとすれば、<民話>ジャンルと<演劇>ジャンルという二つの小世界は、願望に従って文節化された最初の行為項範疇によって規定され、願望が<探索>の、同時に实际的でもあり、神話的でもある形態の元に表出されるような発言=物語を生み出すことができるのである。」(Greimas 1966=1988, 229)

プロップとスーリオは物語の登場人物や機能の類型化を図ったものの、それらが目録的な類型化にとどまっていたことから、グレマスはこの行為項概念を足がかりとしてこの上記の二者の理論を統辞論の定義を基に両者の関係性を軸に、一般化させていく。つまり、物語における主体とその対象を統辞論でいう主語と目的語であるとし、「主語」が「目的語」に対して「述語」をする」という関係性を一般化することで、文章構造自体の統辞論的關係をこの物語全体を構成する行為項カテゴリーにおける主客の關係性に導入したのである。

図1においてプロップの「主人公」vs「探し求められる人物」、スーリオでは「一定の方向を与えられた主題の力」vs「望まれた善の代表者であり、一定の方向を与える価値の代表者」である。(Greimas,1966=1988) 両者においてこれらの二項対立をつなぐものがグレマスのいう「願望」であり、「主語が客体を願望する」という構造が統辞論的に主体と客体を形成するのである。この軸のことを目的論的秩序²、ないしは力(pouvoir)の一変調 (Greimas,1966=1988,174) と呼んだ。なぜなら物語を動かす動力、エネルギーがこの目

²この目的論的な物語構造の解釈はクロード・ブレモンによって批判されている。プロップやグレマスの物語の目的論的解釈では結論は一つしかないということになる。彼はそうではなくて、一連の行為の流れはあるものの、それらは枝分かれした形に記述されるべきであるとした(土田 1996)

的論的な願望の関係に現れているからである。

(ii) 行為項カテゴリー<送り手>vs<受け手>

| | | | |
|------|-----------------|----|-------------------|
| 統辞論 | 送り手 | vs | 受け手 |
| プロップ | 派遣者 | vs | (探し求められる人物および)父親 |
| スーリオ | 善の配当者である 審判者 | vs | その善を潜在的に受け 取る者 |

図 2 (Greimas,1966=1988 より筆者作成)

さらに図 2 においても同様に、送り手と受け手の軸が挙げられ、この軸を「因果論的秩序」と呼び、「知の一変調」(Greimas,1966=1988,174) とグレマスはいう。統辞論的に言えば、送り手が主体を使役するのである。こちらプロップ、スーリオの両者からも導き出すことができる対立関係である。これは先ほどの願望が目的論的であり、その願望の根拠となる軸がこの軸ともいうことができる。一体なぜ客体が求められるのか、それを得るべきなのか、そういった「価値を決定する超越的な決定者」(土田, 1996)を措定する。そういった正しさ、倫理、道徳といったことを含めて、伝達(コミュニケーション)の軸³と呼ぶ。

グレマスはこの送り手と受け手の軸を命令とそれへの受諾の図式から構造化する。つまり、送り手は先述したように、「価値を決定する超越的な決定者」であった。その送り手はその価値を基にした契約を主体に命令し、主体は受諾する。送り手から客体を受け手に送られること自体が、その送り手の契約を受諾したこととなるのである。また、意味論を基に統辞論的な解釈を行うグレマスはプロップにおける禁止と違反についてもこの命令と受諾との関係の否定形として説明する。つまり、レヴィ=ストロースも指摘しているように<命令>の<否定変形>こそが<禁止>であり、そしてそれと同じ論理で<受諾>の<否定変形>が<違反>なのである。つまり命令があるから受諾があるように、禁止があるから違反が生まれるという二対の対応関係がここにはあるのである。この相同関係からプロップにおける結婚という機能を命令と受諾の関係性の中に位置付ける。

「プロップが<結婚>として示した物語の最後の機能を、この相同によって解釈し直すことができる。事実、物語全体が契約の破棄によって口火を切られたとするなら、さまざま

³ これを単なる会話をはじめとしたコミュニケーションではなく、コミュニケーションは物體的な何かに問わず、何かしらを伝達ないしは送るという非常に抽象的に意味しかないことに注意していただきたい。

まな出来事を経た後で、その破られた契約を再び成立させるのは、結婚という最後のエピソードなのである。従って結婚はプロップの分析が想起させるような単純な（出来事としての）機能ではなく、探索の対象（客体）を受け手に提供する送り手と、それを受け取る主体＝受け手との間に結ばれる一つの契約である。その結果、＜命令＞vs＜受諾＞と同じやり方で定式化されなければならない。」(Greimas 1966=1988, 257)

つまりこの軸において述べられているのは、プロップの分析した魔法昔話における結婚を具体例に、物語の序盤に破られた契約、つまり禁止と違反があり、その後結婚を通して、命令が受諾される。この契約と受諾という関係性とその否定形を含めて、前者の二対を契約の否定形、後者を契約の肯定形として、これらの起こる軸のことを伝達の軸と呼ぶ。

| | | | |
|------|---------|----|-----|
| 統辞論 | 補助者 | VS | 反対者 |
| プロップ | 助手(贈与者) | VS | 敵対者 |
| スーリオ | 援助者 | VS | 反対者 |

図3 (Greimas,1966=1988 より筆者作成)

続いて補助者と反対者の軸については、彼自身も強くは言及していないものの、それを意志の一変調 (Greimas,1966=1988,174) として考えてみたいと述べる。なぜならあくまでも上記の二者の関係とは異なり、二次的なものであり、主人公が行為への参加者であって、統辞論的に言えば、主体を形容する修飾的位置に位置付けられている。つまり

「ここで問題になっているのは状況への＜参加者＞であって、場面の真の行為項ではないということができよう」

「機能が行為項を構成するものとみなされている限り、相(アスペクト)の範疇が、主体＝行為項の下位系列的な定式化であるような状況項に構成できるということをどうしてみとめられないかがわからない。われわれの関心を引く神話的表出においては、補助者と反対者は、行動する意志の投影物に過ぎず、またその願望との関わり合いにおいて、益になる、あるいは害になると判断された、主体自身の想像的抵抗物にすぎないということがよく理解できる。この解釈にはそれ相応の価値がある。それは、二つの目録において、真の行為項と並んで状況項が現れる事実を説明しようとし、また状況項の統辞論的なステイタスと意味論的ステイタスとを同時に説明しようとするのである。」(Greimas 1966=1988, 233-234)

⁴ 統辞論に基づいて「副詞に対して形式的なステイタスを与えたいと考えた際、われわれは副詞を機能の下位系列的な下位クラスを構成する相（アスペクト）として示した」(Greimas 1966=1988, 233)

あくまでも上記の二者の関係とは異なり、二次的なものであり、主人公が行為への参加者であって、統辞論的に言えば、主体を形容する修飾的位置としてのステイタスに位置付けられている。そして本稿の陰謀論の議論への先駆けとして、悪の存在と、善の存在の二項対立が前提となっており、この反対者と補助者というのはその二項対立における存在のそれぞれの願望を達成するための手段、ないしは立脚する問題意識と考えられる。なぜならあくまでも陰謀においての問題自体が、意志の投影物としての恣意的な問題設定であり、この二次的参加者という妥当性に一定程度当てはまるだろう。例えば、西洋文明への批判をするため、手段としての西洋医学に問題設定し、それに対する日本原住民における東洋医学といったものが立脚するあるべき姿としての補助者に適応するだろう。

上記の関係性をそれぞれ導き出したことからそれぞれの登場人物 6 人による行為項モデルを導き出した(図4)。

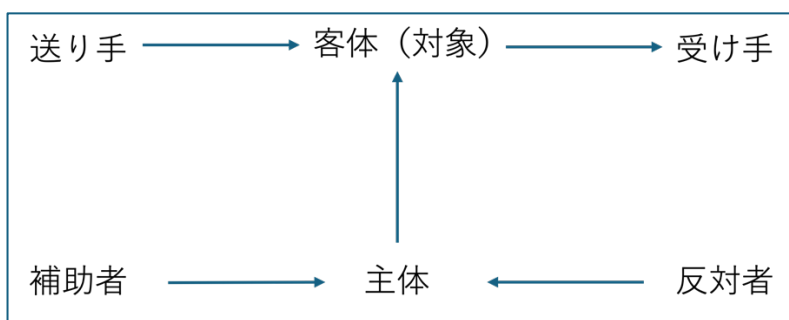


図4 (Greimas,1966=1988 より筆者)

下記に、筆者によるRPGなどにおける典型例を基にした筆者なりのグレマスの行為項モデルの説明を記す。

まず主体と客体の縦の軸をグレマスは願望の軸とし、「主体」がいわゆる主人公であり、「客体」がその「主体」がその物語において求める物/人物である。例えば、ドラゴンに囚われた姫や、伝説の剣、理想の愛などである。

続いて、下部の「補助者」、「主体」、「反対者」の横軸については力の軸とされ、補助者は、主体が客体を追い求める上での補助をする存在、一方で反対者は主体が追い求める際に障害となる存在である。こちらは、あくまでも賢者や、アイテム、仲間が挙げられるが、物語において、主体の願望に基づいて、補助者であるか、反対者であるかが決定されるため、固定的な者ではなく、物語の最中に主体の願望によって、立場が逆転しうる流動的な存在である。

最後に上部の「送り手」、「客体 (対象)」、「受け手」の横軸である。こちらは、伝達の軸とされ、「送り手」がこの物語の秩序を設定する。たとえば、ドラゴンを討伐したもの

に王妃を与えると言うルールを作り、その下で主体は結婚をしようと「願望」し、竜を討伐して、王妃と結婚をする。この例では受け手と主体は同じであるが、時としては主体がドラゴンを倒し、人類という受け手に対して平和をもたらすということもあり得るだろう。プロップの分析した魔法昔話においては基本的にグレマスの言う主体と受け手が融合することが非常に多かったため、グレマスはそれらを分離させた。そしてこの物語全体の枠組みを作り、主体が客体を受け手へと導く願望を規定し、それを実現するつまり、ストーリーの筋道を設定するのが送り手であるとした。

グレマスはこの構造を用いて神話を分析したが、神話だけではなく、「ある願望を実現しようとする文学上の企図」には全て適応可能であるとしており、マルクス主義といった理念が描く世界像に関しても以下のように適応可能であるとしている(Greimas 1966=1988)。このことから前説で述べたマルクス主義から陰謀論へと変化していった太田龍の思想構造に一定の一貫性があるという栗田の指摘からこのグレマスによる行為項モデルから一定の構造に当てはめ、その変遷を調査することが出来ると考えており、本稿ではこの分析枠組みをもとに分析を行っていく。

| |
|-----------------|
| 主体.....人間 |
| 客体.....無階級社会 |
| 送り手.....歴史 |
| 受け手.....人類 |
| 反対者.....ブルジョワ階級 |
| 補助者.....労働者階級 |

図 5 (Greimas,1966=1988 より引用)

4.先行研究について

太田龍についての研究は日本では筆者の調べた限り非常に少ないものの、一方で栗田英彦による研究の蓄積がある。(栗田 2019)によると太田の思想は<辺境対中心>、<自然対文明>など、太田における共産主義的思想から陰論的思想への変遷を辿る上でこのような二項対立という図式が維持されているとし、初期の共産主義においては「資本家 vs 労働者」だったものの、この二項対立が高度経済成長ないしはグローバル化が進展することによって支配/抵抗の主体を「資本家対労働者」のような実態的な形で把握することが困難であるということは現代思想においても指摘され、そこから「帝国主義 vs 辺境」に移り変わり、さらに「科学 vs 自然」「ユダヤ人 vs 日本原住民」、「ユダヤ教 vs 神道」「宇宙人 vs 地球原住民」と言った変遷を遂げてはいるが、二項対立の形式自体は常に保たれている。このことから、改良主義的な立場によって、共産主義における資本家をはじめとした権威に対して革命を起こすことが困難となる中で、太田にとって、世界を変えるべく新たな革命を起こすための存在とその敵が存在していると主張し続けた。それが偽史や陰謀論を用いた主張であったとしても、革命を起こす存在、革命を起こす対象つまり抑圧者と被抑圧者を措定し続ける必要があったと革命の実現に向けた太田の戦略的な陰謀論の利用を栗田は強調している。(栗田、2021)

一方で陰謀論を対象にした研究においては昨今において、世間の注目とともに増加してきている。例えば、政治学における議論や心理学的な研究、社会学やメディア論によって多角的に分析がなされている。さまざまに研究がされている一方で、本稿では特に陰謀論を物語論によって研究を行った(Hydrisko John, 2021)による QAnon のトランプを組み込んだ陰謀論を調査した研究に注目したい。なぜなら陰謀論を対象にした物語論の研究は確かに多く存在しているものの、(Raab, 2013)のように陰謀論を一定のスケールで区切りながら、陰謀論的なものとそうでないものをその陰謀論の真実さを基準に定義した量的研究が多くあり、この違いから、陰謀論を信じる人がどういった性質を持っているのかを明らかにした。しかし本稿においては神話や昔話などを含めた私たちの認識を形作る「物語」の一つとして陰謀論を位置付け、分析する構造主義的な立場を取るため、その系譜に位置付けることができる、(Hydrisko John, 2021)の分析を取り上げる。

この研究においては、QAnon における「ドナルド・トランプが、世界を支配する秘密結社と戦っている」とする言説を一つの物語とし、それを対象として特にその修辞学に関する分析を行った。この研究が基盤としているのがアリストテレスの『詩学』における物語の分析する一要素である Fortune である。この Fortune とは悲劇であれば、終盤に従って fortune は下がり、喜劇であれば、終盤になるにつれ fortune は上がっていく。その物語の時系列的な流れを、fortune を使って分析することができるわけだ。この fortune を、細かな浮き沈みはあるものの、物語の大きな流れとして上げ下げさせることで物語は作られていく。以下から簡単に fortune を横軸にとって矢印を用いて著名な物語も上げながら追記

しておく。それはシンプルな喜劇的な下剋上の物語(↗)や悲劇の物語(↘)だけではなく、浮き沈みが激しいイカロスの物語(↗↘)やシンデレラの物語(↗↘↗)やオイディプス王(↘↗↘)の物語といった物語がこの研究では挙げられている。その中で定量的な調査からこれらの物語の形式の中で、結果としてシンデレラの物語形式が最も読者に人気の物語でありイカロスの物語が最も不人気であるという結果を出した。これらの物語形式の分析から陰謀論においては、fortune を軸に分析をすると、まずこの世界が陰謀によって支配されておりあるべき姿ではないことから、陰謀を画策している敵対者(antagonist)を倒そうとなる(↗)、しかし実際にその敵対者は自己を隠蔽し、理想の世界にすることは不可能(↘)、だが主人公(protagonist)であるトランプにはそれができる(↗)という形式、つまり(↗↘↗)の形を取ると明らかにした。つまり、トランプの存在を措定しなければ最も人気のないイカロスの物語(↗↘)であるが、トランプを物語に導入することによって初めて、最も読者に人気のあるシンデレラの物語に変化する。陰謀論という物語における Protagonist(主人公)と Antagonist(敵)概念に注目し、トランプを陰謀論の物語の主人公として位置付けることによって、悲劇的な物語から喜劇へと変貌させることは(Kurt Vonnegut, 2005)が示唆するように創世記や新約聖書、旧約聖書と同様の救世主義的な物語にも用いられており、読者を惹きつける構造になっていると示している。

グレマスの行為図式を用いてシンデレラ(Onodera, 2010)、映画 (Saraswati, 2022) や中国における文化大革命において個人の物語の分析 (Wang, 2005) など、幅広いジャンルに対して広く分析されている一方で、マルクス主義といった理念を当てはめた研究も存在しておらず、陰謀論に当てはめて分析を行った研究もいまだなされていない。そこで、本稿では太田龍というマルクス主義から陰謀論へと変化していったとされ、その変化の中でも(栗田 2019) のように同様の構造を持ち続けていた人物を対象にする。そしてマルクス主義をはじめとした理念さえも構造化することのできるグレマスの行為項図式を用いて、マルクス主義からの系譜を引き継ぎつつ、太田の陰謀論を分析し、それが陰謀論一般を分析する上で一定の妥当性があることを示していく。

第2章：分析

1. 妥当性についての検討

「行為項モデルについての解釈」

先程のグレマスの行為項モデルの定義に加えて、構造的な説明をさらに付け加える。プロップの31の機能を冗長的であるとして、二項結合を行う。例えば伝達の軸の述べたような、命令/受諾の対を契約の成立、禁止/違反を契約の破棄として、契約という機能(A)にまとめる。さらに言えば前者の契約の成立、つまり契約の肯定をAと置きその否定形である契約の破棄、つまり契約の否定を \bar{A} と置く。つまり契約という機能において対立された関係として記述することができる[以下の \bar{A} , \bar{a} はそれぞれ範疇A, aの否定形を表す]

$$A \text{ vs } \bar{A} = \frac{\text{命令}}{\text{受諾}} \text{ vs } \frac{\text{禁止}}{\text{違反}} = a / \text{非 } a \text{ vs } \bar{a} / \overline{\text{非}a}$$

上記の公式は命令が「a」であり、それに対応する「非 a」が受諾であり、これがグレマスの意味論における考え方であり、「a」の否定である「 \bar{a} 」は禁止となり、「 $\overline{\text{非}a}$ 」は否定の否定であり、違反を示す。

さらにこの契約(A)の機能に加えて、試練(C)という機能を設ける⁵。こちらも契約と同じように直面があるから成就があるという関係なのである。

「試練の役割は、それ自身が確立された秩序に対する違反の結果である疎外の忌まわしい効果を無効にすることにある。」(Greimas 1966=1988.265)

上記からもわかるように試練とは秩序下におけるその法自体の喪失と、法の充足として理解をしていただきたい。試練(C)を秩序共に説明し、試練における否定状態(\bar{C})が秩序からの疎外であり、試練が肯定状態(C)を秩序への再統合とグレマスは指摘した。そこから

「価値の疎外がその十全な享受に対応するように、(確立された秩序)契約の存在は、(秩序)の契約の不在と対応している。」つまり「法のない世界においては、諸々の価値

⁵ 試練というのはプロップの言う直面と成就を対にした機能である。これは調査 vs 情報、欺瞞 vs 屈服、裏切り行為 vs 欠落の三つの要素に分解される。ここでは省略する。

は転倒しているが、これらの価値の回復は法の復権を可能にするのである。」(上記共に Greimas 1966=1988. 272)

この価値の転倒した法のない世界と、その法の復権を物語は常に必要としている。そして、その物語の前半部において、法のない世界が、後半部においては法の復権が対応している。しかしここで語り手は選択を迫られる。

「後半部は、実際のところ、疎外された人間と、諸価値の十全さを享受する人間との二者択一を提起している。…我々が社会的契約として規定した A のステイタスも、また同様に一見したところ伝達の形式を持っている。つまり、送り手は受け手に行動することを強く命じ、受けては指令を受け入れる。従ってこれは自由に同意された義務である。A の場合は、送り手は受け手に行動することを禁ずる。これは明らかに、ある行為を行うように(であって、行わないようにではない)という誘い掛けである「a」(契約(A)の下位機能である命令)の、つまり命令の否定変形(禁止)である。契約はそこでは、人間から行動の可能性を奪う否定的秩序に属している。」(Greimas 1966=1988. 274)

この人間個人の行動の可能性を奪う否定的秩序に対して、物語における人間は A において自由を持っている。つまり、その否定的秩序への違反つまり(非a)を行うことができる。命令の否定の否定とは理論的には一定の妥当性を持っている。つまり、

「行為項を考慮に入れば、その矛盾の実態が明白となる。違反はやはり一つの指令、送り手の否定を含み、受け手が送り手の代わりになる命令である。…その結果「A vs A」は社会的契約の確立とその破棄の対立であるが、契約の破棄はもう一つの積極的な表意作用、つまり個人の自由の肯定を持つということがわかる。従って、物語が提起する二者択一は、個人の自由(言い換えれば契約が存在しないこと)と受け入れられた社会的契約との間の選択である。…この表意作用によって、矛盾、すなわち不可能でもあり不満足でもある選択が現れてくる。ロシアの民話の文脈においては、個人の自由には、その必然の結果として疎外が伴うし、また諸価値の再統合は秩序の樹立によって、つまりこの自由を諦めることによって贖わなければならないのである。」(Greimas 1966=1988. 274-275)

そしてこの秩序と自己の矛盾を物語はどのように解決をするのかという調停という機能が存在していると指摘し、その調停は2種類に分岐する。つまり、

「おそらく一般化しすぎることになるかもしれないが、この物語というジャンルは二つの大きなクラスに分類できるように思われる。現存の秩序が受け入れられている…物語と現

存の秩序が拒否されている…物語とである。第一の場合、出発点は存在するある種の秩序の確認、およびその秩序を正当化し説明しようとする欲求にある。存在し、社会の、あるいは自然の秩序であるが故に人間を超える秩序（昼と夜、夏と冬、男と女。若者と老人、農耕者と狩猟者などの存在）が人間のレベルで説明されているのがわかる。探索、試練は、諸々の秩序を創設してきた人間行動なのである。物語の調停は、＜世界を人間化する＞こと、世界に個人的及び出来事的な次元を与えることにある。世界は、人間によって、世界に統合された人間によって、正当化される。第二の場合、存在する秩序は不完全なもの、人間は疎外されたもの、状況は耐え難いものとみなされる。そこで、物語の図式は、調停の原型として、救済の約束として投影される。人間、個人は世界の運命を自分自身の責任において引き受け、世界を一続きの闘争と試練によって変形しなければならない。その結果、あらゆる耐え難い欠落状況の解決法を提案しながら、救済論のさまざまな形態を説明する。」(Greimas 1966=1988. 278)

「物語は、全く反対に、均衡と中和化された矛盾を含むものという印象を与える。物語が本質的に調停の役割を担って現れるのは、このような展望においてである。それも、多様な調停というべきであろう。つまり構造と行動の間の、永続性と歴史の間の、社会と個人との間の調停である。」(Greimas 1966=1988.278)

物語とはそこで、前半部での疎外された状況をいかに克服するかということに向けた調停という機能を持って二分化された形で結論を迎える。つまり、一つは秩序への再統合、二つ目は秩序に再統合せずに疎外続けるが、救済の約束として結末を迎える。それは主人公というものに一定の自由を付与することによる、分化なのであり、それは構造と行動、永続性と歴史、社会と個人の調停として顕在化する。まさにこの秩序に疎外され、そこにおいて救済の約束として陰謀を打破するという約束を胸に抗う陰謀論者の物語認識と類似した構造が、このグレマスにとって物語には共通のものとして存在しているということである。

「太田龍の思想への妥当性の検討」

一般にこう言った図式化を行う際に、モデルにおけるそれぞれの項に関する定義を参照するのであるが、グレマスの著作においては個別的な項それぞれに対する定義ではなく、軸上の二項間における関係の定義から項それぞれに説明を加える。すでにグレマスによる行為項モデルの図式の説明をしたところで、この節では太田龍の膨大な著作からこのモデルの適応に一定の妥当性があることを明らかにしていきたい。

太田龍の著作に関しては、これまでの二項対立図式の類似性や、(Hydrisko John, 2021)

による陰謀論が物語論と同様の形式を維持しているという主張からグレマスの行為項モデルを当てはめるということに一定の妥当性があると考えているが、二項対立の類似性を前提のもと、グレマスの図式を当てはめる上で、さらに実際にそれぞれのグレマスによる具体的な行為項分析におけるそれぞれの項の定義を確認し、太田の著作のそれぞれの存在が当てはまるかを検討していく。

この妥当性の検討において難しいのが、太田は同様のことを言っていたわけではなく、時代と共に、理論が変遷していった。太田自身も自分自身の歴史観について述べている。この変遷過程こそが本稿の着目したいポイントではあるが、どこまでをこれから適応するグレマスのモデルに当てはめる一単位として区切ることができるかということである。そこでまずは栗田英彦による大まかな三つの時代区分に基づいて見ていきたい。太田自身による歴史観の変遷に関しても、(太田 2003) で自ら述べているⁱⁱⁱ。そこで太田の時代区分と栗田の時代区分の類似性をもとに、(栗田 2019)における時代区分からそれぞれ具体的に説明を行っていく。(以下に国立国会図書館の検索から、太田龍による著作による時代区分も記載する。⁶

(i) 第一期：新左翼過激派時代（1960～70年代）

『世界革命』三一書房 1967～『革命理論の革命：マルクス＝レーニン主義批判』新泉社 1979)

戦後における、左翼運動の一員とする一方で、この左翼運動に対して、スターリン批判、ないしはハンガリー騒乱を通して、前衛党が生まれ新左翼が形成されていった。太田龍はその一つである、革命的共産主義者同盟（革共同）を形成する。労働者に依拠した革命を起こすトロツキストであったが、60年代後半にはベトナム戦争や中国の文化大革命、チェ・ゲバラの国際的な革命闘争への転戦を踏まえ、「辺境」（原始共産社会）に根拠を置く世界革命論へと移行していた。なぜなら「大学闘争、全共闘運動の最終的な一つの帰結は、日本帝国主義に対する闘争ということを中心として主張していたけれども、しかし、これは日本という帝国主義本国の土俵を出ていないんじゃないかと、そういう反省があったんです。日本帝国主義が支配している植民地の人たちの戦いというものが、少しも、我々の戦いの中に入っていないんじゃないか、そういう反省に到着して」（太田,柴谷 1980.10）いた。ここから帝国主義への闘争というものが帝国主義内という閉鎖された空間の中で行われていたことに疑問を持ち、辺境を志向したのである。その辺境とは「人間を超える自然の発現の形態であり、…野蛮のあなたにあって、帝国の《文明》が全力で追跡してもとらえることのできないもの」（太田 2011.25）なのである。そこから 1970 年から日本人としてのナショナリズム性を自己批判し、戦争責任問題やマイノリティ問題やポストコロニアルな問題に

⁶ 国立国会図書館リサーチから「太田龍」による図書とされているものを彼が亡くなる 2009 年までリスト化し、栗田の時代区分に合わせて付記しておく。翻訳は除き、共著は含んでいる。没後の復刻版、遺稿といったものも除く。

取り組むようになる新左翼運動の潮流とも結びつきながら、特に、自身の故郷でもあったアイヌという日本帝国主義に支配されてきた民族からの革命を目指した。これらは帝国ないしは中心に対する辺境を志向し、それはある種、太田にとって、「辺境最深部に向かって退却せよ」という著作のタイトルの言葉があるように、その権力が届き得ない場、つまり地理的退却なのである。

(ii) 第二期：自然食・原住民史観時代（1980年代）

（『自然観の革命』現代書館 1980～『エコロジー教育学：真人類への進化の途』新泉社 1989）

そこからこれらの理論が成り立たなくなっていく。つまり米中国交正常化（1979）を経て、自らを「第三世界」と位置付けていた中国は大国の仲間入りをする。太田から見れば、「辺境」の最重要拠点が、「反革命」に転向したわけであり、アイヌにおける運動は反差別運動や権利要求運動という組織側への適応を目指したことで、太田の目指すアイヌモシリ独立闘争（＝「辺境」からの革命闘争）は空疎なものにならざるをえなくなる。太田にとって、組織側に適応するような改良主義的な立場を否定し、その革命主体の純粋さが不可欠であったからこそ、辺境からの革命の出発点を改める必要があった。ここから、地理的な出発点がグローバル化の中で消滅していった太田にとって、それはどこに出発点を置いていいのかわからなくなったといえるだろう。そこで太田は何を出発点としたか？それは日本原住民である。日本原住民こそが太田にとって、純粋な革命主体なのである。原住民を歴史に追い求め、科学技術さえ存在しない、自然との共生としての過去、つまり民族的、宗教的退却なのである。太田龍はこの日本原住民を過去として、そしてそれと対立させて、現代の世界を支配する存在、つまり一神教文明、特にユダヤ教を批判する。つまり、前者が原始共産社会における「万類共尊」の文明とし、後者は「人類独尊」の文明として自然支配・階級社会を生んだとするのである。

(iii) 第三期：陰謀論時代（1990～2000年代）

（『UFO原理と宇宙文明：21世紀科学への展望』日経企画出版局 1991～『2人だけが知っている世界の秘密』成甲書房 2009）

太田龍にとって、純粋性を追い求めた結果、ユダヤ人というものが純粋な悪であるということに懐疑的にならざるを得ない。「私は人類という種族の根本欠陥は、人類の中から国家権力という組織を生み出してしまったことであると定義したい」（太田 1986. 30）あくまでもここでは国家組織自体の発生自体に否定的ではあるものの、それ自体の原因については問題にされておらず、人類の責任としている。しかし支配もない動物も人類も平等な世界を実現しようとする太田龍の願いにおいて、人間それ自体の中で善か悪かを分けることはできない一方で、一神教宗教、文明を悪の存在とすることは革命につながらない。宗教、文明、技術はあくまでもその社会的契約の中での悪の存在にとっての手段であって、

悪の存在それ自体ではないからである。その手段を批判すること自体はアカデミアを批判した太田にとって、それは体制内部に取り込まれた改良主義的な立場なのである。太田はだからこそ、善と悪において手段を作り出した恣意的で具体的な存在が体制外部にあると措定し続けた。そこで新たに悪の存在を措定するきっかけとなったのが、デイヴィットアイクたちによる異星人、爬虫類陰謀論であったのだ。地球から生まれた元々の存在は善であり、地球の外部から地球を支配しようとしてきた宇宙人という存在が悪であり、それらこそがこの抑圧の純粋な根源存在なのである。これこそ、宇宙的退行である。

つまり、最後の抽象的な議論を避けたことも含め、一貫して、改良主義的な立場を批判した。なぜなら社会秩序が恣意的なものであるという前提のもと（神という絶対的存在を措定しなければ、その社会秩序をそれとして受け入れることはできず、恣意的なものと考えざるを得ない。）、改良主義とはそれを利用しないしは作り出す悪の存在に屈服することを意味するからである。その善の存在と悪の存在を具体的かつ純粋に追い求め続けた。それは社会的に規定された立場はその社会内部においての闘争であって、その闘争自体で社会を批判することができない。だからこそ、現存の体制を批判するべく、現存の体制と対する形体制外部の新たな存在を措定し、そこへ退却し、そこから立脚する革命理論を打ち立てようとしたのだ。

それはつまり現行の社会体制から退行し続けたということ、つまり疎外される方を選び続けたということである。これがグレマスの物語分析における主体の調停を許さなかったということと一致し、その物語が完結しない、つまり新たな物語を生成しなければならぬ状況であったのではないだろうか。

さまざまな太田の理論の中での対立図式がある中で、特にその体制外部にある存在と体制としての手段を二分しておかなければならない。なぜなら体制内部の対立は体制外部の存在の対立があって初めて存在し、その体制外部の存在を太田はあくまでも元凶として措定しつづけた。そこで文明の対立であるユダヤ教（vs 日本教⁷）や科学（vs 自然）というものはあくまでも体制内部の手段であり、体制批判を行う陰謀論においては次元の異なる議題である。そのため本稿ではグレマスにおける二次的な行為項である補助者、反対者に位置付け、中心的に取り扱うのは体制外部の存在、つまり栗田の時代区分とも並行する、資本家（vs 労働者）、中心者（vs 辺境者）、ユダヤ人（vs 日本原住民）、宇宙人（vs 地球原住民）である。

言及しておかなければならないのが、特にモデルにおける主体を、陰謀を画策する抑圧者にするか、その陰謀に抗う非抑圧者にするかは一定の考慮が必要であろう。なぜなら抑圧者も、非抑圧者もどちらもそれぞれのグレマスの言う「願望」を持って陰謀論という物語には存在しており、シンデレラの物語のように主人公は存在しておらず、視点次第で陰

⁷太田龍は『ユダヤ問題入門』においてユダヤ教との対立概念として日本教というタームを用いて説明をしている。ここでは広く日本原住民から生まれる文化と広く定義する。

謀論者を主人公として考えることもできる一方で、陰謀論者に抗う非抑圧者を主人公としても考えることができるからだ。抑圧者の願望は支配であり、被抑圧者の願望は支配の克服である。

2.結果

「主体と送り手の二重性」

グレマスの行為項図式を太田の陰謀論に当てはめようとするすると二重性が生まれる。主体と送り手が合致してしまうからだ。日本原住民とユダヤ人の拮抗としての思想を考えた場合には、マルクス主義における歴史といった、物語内の登場人物の行動を規定する普遍的な存在(つまり送り手)は存在せず、その送り手は主体である日本原住民になってしまう。なぜなら、そうあるべきだと判断を下すのは日本原住民であり、日本原住民が存在を維持するためであるからだ。それはあくまでも、自己が自己に課した試練であり、自己完結的なその物語において、「価値を決定する超越的な決定者」である送り手は存在しない。物語における送り手とはその物語のルールを規定するであるはずだが、その位置に主体が置かれるようになると自己目的的な物語が生まれるのだ。

一方で主体の置換が可能であると先ほど述べたが、この送り手と主体の二重性に関しては、抑圧者が主体であっても同様のことが起こる。抑圧者を主体と考えた場合にも送り手は抑圧者以外にはない。これらはつまり陰謀論的物語において、物語における正しさがそれを実行する主体によって決定されるという恣意性を意味している。陰謀論の世界には依拠することのできる正しさは存在せず、恣意性のみが存在し、その恣意性こそが送り手を決定する。しかしこの「価値を決定する超越的な決定者」である送り手は主体である抑圧者とは別の次元において存在する。

「革命理論の変遷の図式的解釈」

これらが行為項モデルにおいて主体を置換したとしてもその恣意性によって実質的な恣意的な物語として説明されることとなる。そこでこの恣意性に基づいたモデルから読み取れることがわかったが、そこから太田龍がその理論を変化させていく説明はされていない。そこで以下に変遷に関する太田のダイナミズムを説明していく。

資本家 vs 労働者の革命理論が現行の社会秩序を変えると信じていた太田は、実はその革命理論自体がイデオロギーであり、その革命理論における闘争自体がその背後にある悪の存在を明らかにする。

「マルクス主義が、人類の危険を救う力を持つと考えた。しかしその後、20年余の私の

体験はそれが誤りであることを教えた。むしろ逆に一神教イデオロギーの変種としてのマルクス主義は三つの一神教団の相互絶滅的闘争によって準備されてきた人類自滅の傾向を促し、推進し、先導する要因であることを数限りもない証拠によって自らの正体をバクロしてしまったのではないか。」(太田 1986.65-66)

「一神教団国家における唯一の神の正体は何か。私見によればそれは、人間の心が生み出した人類至上、人類中心主義という妄想である。」(太田 1986.79)

マルクス主義という革命理論を用いて認識をしていた世界が実は恣意的に築き上げられたものであり、そのマルクス主義自体が実は送り手によって命令され、受諾をした主体であったのである。つまりマルクス主義自体の限界を、新たに送り手というマルクス主義を作り出した体制外部の悪の存在を創造することによって恣意的な革命理論であったとして、相対化する。そして、この送り手を埋めようとする行為が、太田においてマルクス主義から陰謀論へと至る道筋を裏付ける。彼による発展の契機はこの送り手の創造、ないしは深化と言える。このマルクス主義批判から中心、さらに一神教批判へと変遷を遂げる。

つまり、マルクス主義の起源を求めてみると、それは地理的に、一神教である西側にその起源があり、そのマルクス主義と資本主義の闘争構造が実は現代社会の中心、つまり西洋においての国家の誕生と階級の形成を契機にしたものであるとした。そこからマルクス主義を基にプロレタリアートとして団結していく革命行為自体が、その闘争構造自体に組み込まれており、そのマルクス主義を作り出したイデオロギー自体の再生産を行っているとするのだ。その闘争によって「人類は全体として地球生命の敵」であり、「人類の「生産力」の増大はそのまま「地球破壊力」に結びつく」(太田 1986.12)としたのだ。今まで信じていた被抑圧者としてのマルクス主義理念自体が抑圧者側のイデオロギーであったと突き止めたのだ。

太田はマルクス主義の相対化によって、マルクス主義を含めた中心側のイデオロギーに対抗をするためにその中心とは相反する場、つまりアイヌや太田の用いたタームで言えば辺境となるのだ。太田にとって、戦後の新左翼は従来の左翼が国家の枠組みを超える視点にかけていたことを批判し、在日中国人などのマイノリティに目を向けたのだが、一方太田はマイノリティを抑圧したのは近代社会であり、新左翼もその近代に加担していることを批判し、新左翼に関わった自らを自己批判している(太田 1973)。これは太田にとってマルクス主義自体を相対化した結果の「帝国の《文明》が全力で追跡してもとらえることのできないもの」(太田 1986.25)への地理的な後退なのである。

しかしこの辺境自体が成り立たなくなる。それは太田にとってアイヌをきっかけとする辺境自体の革命の限界があったからである。栗田も述べているようにアイヌないしはキューバといった辺境、マイノリティを契機にしての革命は限界を迎えた。(栗田 2019.215-217) なぜならグローバル化により、結局のところ資本主義システムという社会秩序の内

部に改良主義的な形で取り込まれるようになってしまったからである。それによって、この地球上において、太田にとっての純粋な革命を行う出発点となる善の存在はなくなってしまう。そこで太田は過去に退行し、純粋性を求めることになる。つまり、日本原住民であり、それに対する一神教の対立構造を作り出したのである。この対立構造は万物が互いに育ち合う世界を志向する日本原住民と人間中心主義を志向する一神教、特に太田はユダヤ教を槍玉にあげる。ここまででマルクス主義、中心、そして一神教批判へと変遷していったことがわかるだろう。このマルクス主義自体が中心者である西洋文明によって生まれ、その中心者を批判する辺境の理論も一神教によって生まれた人間中心主義による闘争是認の革命理論としたのである。

ここでマルクス主義理念のモデル化された先ほどの図を見ていただきたい。マルクス主義理論では、人間が主体であるという、マルクス主義の考え自体が、先ほど述べた人間中心主義の表れであるとし、このマルクス主義が歴史という送り手によって自らの恣意性を隠蔽し、人間を中心に据えるという願望を持った革命理論であることを発見した。そしてその客体である無階級社会とはまさに人間が人間を支配する社会ということが出来るだろう。またここで、願望を持った主体であるということは、マルクス主義を主体とする新たな行為項モデルを作ることができる。つまり人間的支配を正しいとする、中心者を送り手に据え、その送り手からの契約をマルクス主義が受諾し達成するという構造となる。それまで正しいと思っていたマルクス主義理念に限界を感じ、そのマルクス主義自体を批判するために、中心者という悪の存在を送り手として創造し、マルクス主義の相対化を図ったのだ。そしてその中心者概念が、辺境者の存在が社会的秩序に組み込まれるようになったことによって、歴史的起源、つまり人間中心主義的一神教文明によって説明されることとなる。

さらに太田は再び、この一神教への革命理論自体が先ほどのマルクス主義が別のモデルを必要としたように、送り手である一神教の恣意性を再び新たなモデルによって相対化する。つまり一神教が正しいとする人間中心主義の背景には実は別の主体である地球外生命体が存在したとし、人間中心主義における「人間」が、宇宙人が作り出した特殊な人間定義に依拠し、ユダヤ人に対する日本原住民という革命理論がその宇宙人によって作り上げられた区別であり、今度は地球自体の支配をすることを正しいとする宇宙人を送り手として創造したのだ。そして、元々送り手であった一神教が宇宙人によって命令され、受諾した願望を持った主体であったこと、つまりその地球外生命体を送り手とし、一神教を主体とする新たな行為項モデルを生成したのである。これこそが宇宙人陰謀論である。

上記の三つの移行は初期の段階において、マルクス主義が成り立たなくなり、その理念自体が実は恣意的であったということ、つまりその理念が正しいか間違っているかが問題なのではなく、背景に利己的な存在を措定したことから、そのマルクス主義を願望を持った主体に据えて、そのマルクス主義を作り出した背景の存在を創造する。これこそが中心者、さらには一神教であり、その一神教への革命理論自体の恣意性を再び明らかにするべ

く、一神教を作り出した背景である存在を新たに創造する。それこそが地球外生命体なのである。理念が成り立たなくなるとそれを恣意的な主体として、送り手を新たに創造する。なぜならその理念自体が、実はある背景の存在によって利己的な目的の達成に向けて恣意的に作り出された主体とすることによって、新たな革命を行う純粋な悪の存在を想像することができるためであり、その新しさは自己が疎外され続けた太田龍にとって、誰がこの苦しみを作り出したかという諸悪の根源を創造し続けることでその存在と対立する非抑圧者としての太田のアイデンティティの獲得に向けて常に必要であったのだ。革命理論自体がアイデンティティと結びつき、そこにある種の依存をし続けたと言ってもいいかもしれない。送り手としての理念が送り手を満たす正当性がなくなったことによる、送り手の主体化による新たな送り手の創造行為ということができる。なぜなら物語における送り手とは絶対的な正しさを持った存在だからである。しかし実際、現実世界において、絶対的な正しさを持った存在は存在しない。だからこそ送り手を再生産し続けることによって新たな革命理論を作り出し続けたということができるのではないだろうか。

一方で、被抑圧者を主体とした行為項モデルを適応してみると先程の抑圧者のモデルとは鏡のように対応関係を持っている。抑圧者の陰謀論の図式が送り手を変えて新たなモデルを生成している一方で、それに応じてこちらの非抑圧者の図式も変化する。(Práce, Diplomová, 2015)でも述べられているようにラカンの主体性を穴埋めするべく、新たな陰謀論を作り続ける必要があったからである。被抑圧者がグレマスのいう主体であった場合、抑圧者と同様に送り手というのが大きく矛盾する。なぜなら太田が被抑圧者として願望しているのは、その被抑圧者存在の存続であるからである。送り手というものが主体と一致するということだ。

それは被抑圧者を主体とした図式だけではなく、抑圧者の図式の両者によって説明することができる。

ジャックラカンは大他者を自己の内部に作ることによって初めて世界を認識することができると言った。そしてこのグレマスの送り手である、ルールの規定者(送り手)はラカンのいう大他者と類似性を持っている。ことから、陰謀論者にとって、自己自身が大他者を演じざるを得ないことによって、自分自身の主体性が失われていくという循環に陥ってしまうのではないだろうか。

なんか理念が主体って意味わからなくないか？だったら客体としてのイデオロギーがあり続け、そこでの主体を太田龍としてその契約を受諾した自己が騙されたとして、正しい主張をするために新たな純粋存在を送り手に作り続けたのではないだろうか。送り手を作り続けたのは良いとして、さらに太田は主体として社会秩序への違反をし続け、それが回復することのないまま疎外され続けたということを書いたほうがいいのではないだろうか。

第4章：まとめ

1. 考察

栗田の行った時代区分の際に言及した三つの退行（地理的退行、民族的退行、宇宙的退行）があり、太田が主張する理念の立脚しているあるべき姿ないしは、間違った姿としての自然 vs 科学、原始共産 vs 自然支配といった対立は、ある存在に付随した手段としての対立関係であった。それをここでは技術的退行と呼ぶことができるだろう。なぜなら革命主体が対象自体を批判する上で、必ずその現実的な問題を取り上げる必要があり、それはこういった恣意的な技術としての科学や家畜制度、またその一方でそれらに対抗するべき出発点としての技術を取り上げなければならない。それらは純粹性を追求してきた太田にとって技術的退行と言えるだろう。この上記の四つの退行はレヴィ=ストロースが提唱した民族における神話を分析する上での四つの枠組みである地理、技術—経済、社会学、宇宙観の四つのシェーマと類似関係にあるということが出来る。これが意味するのは、太田龍の思想的変遷が恣意的に主張されたように見える一方で、実は抜本的な改革を目指し、新しい世界を作るための依拠する物語としての神話であり、この太田龍の思想的変遷は必然的な経路を辿ってきていたと考えることができるということである。

陰謀論と疎外という概念は密接に語られることが多く、太田と親交があったデイヴィット・アイク⁸を対象にしながら、陰謀論を信じる行為は、陰謀論者が現代社会から疎外されたことによる、現代の権威的な社会システムに対して、自己の「主体性」⁹を取り戻す作業であるとしている。（Práce, Diplomová, 2015）そこでは、権威的な言説に挑戦する言説としての陰謀論によって提唱者が抑圧された主体性の穴を埋めようとするが、それによりますます権力構造の外部へと疎外され、更なる主体性を埋めようと批判することが繰り返されると述べている。これは 1970 年代文化論で述べられていた太田のアイヌ民族を出発点とした革命論の挫折と類似している（藤巻 2022.144-168）と言えるだろう。

言及しなければならないのは、陰謀論というものがこの太田龍の思想的変遷からもわかるように、現存の体制を批判するべく、その体制を恣意的に利用する体制外部の悪の存在の措定することが、陰謀論であり、それに対応する抑圧された体制外部の善の存在の措定しそこに救済の約束を付与することが革命論と呼ぶことができる。そして、そう言った外部の存在を措定することによってこそ、救済という形での非現実性を含んだ立場が逆説的に、栗田の述べるような革命理論として成り立ちうる陰謀論なのだ。太田が持ち続けた善悪の存在の純粹性を追求し続ける態度、逆に言えば、存在の恣意性に基づいて新たな存在

⁸ 爬虫類陰謀論を初めて唱えたとされる人物であり、太田龍も彼の陰謀論を参考にしながら、自身の爬虫類陰謀論を発展させていったが、アイクは地球原住民に依拠したが、太田は縄文日本文明に依拠してそれぞれの理論を展開していったとされる。（齊藤,2023）

⁹ この主体性は Práce, Diplomová がジャック・ラカンを援用し、「自己に対するある言説体系からの象徴的解釈によって生まれる自己認識とそれに伴う影響力(agency)である」

を創造し続ける態度が陰謀論的なのである。例えば、現行の秩序と調停しようとする改良主義のような方法は体制の内部に組み込まれることであるとし、現行のシステムを無意識に肯定していることとなる。しかしその問題意識自体が実際の体制の支配側の存在によって恣意的に作り出された問題意識であり、そのままでは体制それ自体への批判が避けられてしまう。だからこそ、その体制自体を批判するために生まれる陰謀論の不理解はその体制に組み込まれることを避けるため、社会に統合された人間にとっては当然の反応なのだ。しかしそうして初めて革命理論となり、そして陰謀論となる。その体制内部に取り込まれることのない純粋性の追求が、陰謀論的な言説にならざるを得なかったのではないだろうか。だからこそ、グレマスの行為項モデルにおける太田龍の思想の変遷の分析はこのように潜在的な陰謀論者の動きを可視化する良い手段であると考えられる。

2. 今後の課題

本稿ではポストモダン的な思考がこの太田の陰謀論を通してあきらかになった。なぜなら超越的な決定者である送り手が欠如し、その穴に主体を埋めざるを得ず、その主体の二重性によって、ある種の神(送り手)を設定することができない。それは自らが自らによってルールを規定し、そのルールの中で自らが行動するという二重性がある。なぜなら、ルールを規定する存在はルールの枠外にいるはずであるが、ルールの中で行動をする存在はルールの枠内にいる必要があるからだ。既存の社会における社会制度、規則における恣意性が権力と結びつき、それを批判しようとするが、自らがその制度を批判する枠組みを作るということは、結局、送り手の立場となるということであり、主体としての自己が消滅する。しかしそれは実質的に、自らの存在が秩序から疎外されている状態であり、その社会秩序への疎外をその現行の秩序の背景にいる恣意的な存在の創造によって克服しようとしたのである。現行の秩序の禁止を違反し続ける彼にとって、その疎外をされ続けることを更なる純粋な善と悪の存在を作り出し続けたのだ。

太田龍が、栗田の指摘する革命を行うために新たな革命理論を作り続けたというのも一定の妥当性を持っている。なぜならアイヌ民族を契機に革命論を志向したが、それが結果的に暴力的な行為の結果、その民族運動から離脱せざるを得なくなっていった。しかし、この太田龍のアイヌ革命論があったことによって、アイヌ民族自身が自分達自身のことをどのように社会に位置付け、主張していくかを画策する契機ともなった。(藤巻 2022) その点において太田龍というのはそういった組織への適合を嫌ったが、結果的に新たな運動を起こす火付け役的存在であったということは否定できない。

さらに手法に関して、こういったモデル化することによる単純化をすることによって一般的な物語や神話と比較を行い、わたしたちがどのように認識を行っているのか、陰謀論者がどのように認識をしているのかをあきらかになるという点から一定の妥当性があると考えている。しかしそれが逆に画一化してしまっていることは批判されていて、この陰謀

論における特殊性を省いてしまっているという指摘がある。グレマスの行為項モデルは非常に汎用性が高いため、どんな物語や理念に関しても適応可能であるからこそ、反対にグレマスのモデルを使う妥当性という観点からは一定の批判がなされ、モデルからは削ぎ落とされてしまった部分には目を向けなければならないだろう。また、陰謀論を分析することのできる他のアプローチがあることは否定ができず、この図式が最適であるとは言えない。また汎用性の高さから、主観的な介入がしやすく、手法の段階において恣意的に利用をしてしまったということは指摘できるだろう。それぞれの厳密な定義があるわけではなく、抽象的なモデルであるからこそ、それぞれの項への妥当性の検証、客観性の保証は困難とも言える。これからの研究によって、更なる物語理論の発展を期待するとともに、陰謀論が相対化されるような分析がなされて初めてこの研究が意義のあるものだったということができるだろう。その一方で、こういった権威的なアカデミアによって分析される陰謀論は陰謀論者にとって、権威的な言説の一部として批判の対象とされるであろう。

自分の主眼である陰謀論の一般的な構造の抽出に関して、この太田龍の分析だけでは陰謀論一般について言及する妥当性は不十分である。その一方で陰謀論全体を対象にすることは難しく、噂や、フェイクニュース、妄想、嘘などそれぞれがグラデーションであるようにそれぞれを定義することができない。今後、太田以外の陰謀論に対してこう言った構造的なアプローチをすることから新たな発見がなされることを期待したい。本稿はあくまでも構造の抽出ではなく、提案に留まっているのもこのためである。

文末脚注

ⁱ 以下にプロップによる 31 の機能(行為)を示す

a 導入の状況

β 家族の成員のひとりが家を留守にする(不在)

γ 主人公に禁を課す(禁止)

δ 禁が破られる(違反)

ε 敵対者が探り出そうとする(情報蒐集)

ζ 犠牲者に関する情報が敵対者に伝わる(情報獲得)

η 敵対者は、犠牲となる者なりその持ち物なりを手に入れようとして、犠牲者となる者をだまそうとする(謀略)

θ 犠牲となる者は欺かれ、そのことによって心ならずも敵対者を助ける(幫助)

A 敵対者が家族の成員のひとりに害を加えるなり損傷を与える(加害)

B 被害なり欠如なりが知らされ、主人公に頼むなり命令するなりして主人公を派遣したり出立したりする(救援依頼あるいは派遣)

C 探索型の主人公が、対抗する行動に出ることに同意するか、対抗する行動に出ることを決意する(対抗開始)

↑ 主人公が家を後にする(出発)

D 主人公が試され訊ねられ攻撃されたりする。そのことによって、主人公が呪具なり助手なりを手に入れる下準備がなされる(贈与者の第一機能)

E 主人公が、贈与者となるはずの者の働きかけに反応する(主人公の反応)

F 呪具が主人公の手に入る(呪具の贈与・獲得)

G 主人公は、探し求める対象のある場所へ、連れて行かれる送りとどけられる・案内される(二つの国の間の空間移動)

H 主人公と敵対者とが、直接に闘う(戦闘)

J 主人公にしるしがつけられる(しるしづけ)

I 敵対者が敗北する(勝利)

K 発端の不幸・災いか発端の欠如が解消される(回復)

↓ 主人公が帰路につく(帰還)

Pr 主人公が追跡される(追跡)

Rs 主人公は追跡から救われる(救出)

O 主人公がそれと気づかれずに、他国かに到着する(秘かな到着)

L ニセ主人公が不当な要求をする(詐欺)

M 主人公に難題が課される(難題)

N 難題を解決する(解決)

Q 主人公が発見認知される(再認)

Ex ニセ主人公あるいは敵対者(加害者)の正体が露見する(暴露)

T 主人公に新たな姿形が与えられる(変身)そこで本稿では、日本において、多岐にわた

U 敵対者が罰せられる(処罰)

W 主人公は結婚するか王位に着く。あるいはその両方(結婚)

(クロード・ブレモン(著)坂上脩(訳)『物語可能なものの論理『物語のメッセージ』』1975、審美社)

ii 以下に E.スーリオによる演劇における、占星術の記号を利用した6つの行為項を示す。

- ① 獅子座：一定の方向を与えられた主題の力
- ② 太陽：望まれた善の代表者であり、一定の方向を与える価値の代表者
- ③ その善を潜在的に受け取る者(そのために獅子座が働く)
- ④ 火星：反対者
- ⑤ 天秤座：善の配当者である審判者
- ⑥ 上に記された力の一つをより強力なものにする援助者
(Greimas 1966=1988 から引用)

iii 以下に太田が(太田 2003)において自ら区分した歴史観の変遷(1960年以降)を記す。

第1期…昭和35年(1960)以降の10年間

- ・ 人類文明は自滅しつつある
- ・ 人類史を根底から再検討しなければならない
- ・ 人類はどこで道を間違えたのか。
- ・ 辺境最新部に向かって退却せよ

第2期…昭和45年(1970)以降の10年間

- ・ 日本原住民史
- ・ 縄文に帰れ
- ・ 縄文こそ日本民族と日本文明の源である
- ・ 日本原住民の魂と精神、その文明の再生へ
- ・ そのためには、中国原住民史、世界原住民史を構築しなければならない

第3期…昭和55年(1980)以降の10年間

- ・ 玄米菜食食養道の実践
- ・ 家畜制度全廃論。家畜制度こそ人類自滅への過程の起点であったとの認識
- ・ 天寿学体系の構築と、天寿学的文明の建設へ。すなわち地球世界維新へ

第4期…平成2年(1990)以降の10年間

- ・ 人類を自滅に追い込む元凶としての西洋文明に対する根底的批判を進めていくとその背後に、ユダヤ・イルミナティ悪魔主義陣営が潜んでいることを発見した。ユダヤ・イルミナティ秘密結社の調査研究へ。そしてついにその奥の奥に、デニケンと

-
- ゼカリア・シッチンがほんの少々暴露した、異星人の存在を突き止めるに至る。
- 地球に植民・侵略した異星人によって、地球原住民が丸ごと家畜化されつつある、というこの超重大な秘密が今、デーヴィット・アイク、ウィリアム・ブラムレイ、デーヴィット・ホーンブレイなどの人々によって明るみに出された。

第5期…平成12年(2000)以降

- 地球生え抜き純系地球人類正統文明と、異星人の地球乗っ取り超長期侵略戦争計画と、この両陣営の対決にこそ、人類史の根本主題であるうとする歴史観。
- 日本型文明は、前者すなわち地球人類正統文明の中で、幸運にも生き残ることができたただ一つの民族であり、ただ一つの文明体である。そのようなものとしての日本文明は、今、後者、即ち、異星人由来の侵略者によって息の根を止められようとしている。絶体絶命の死地にわれわれ日本民族は追い詰められている。生き残る方策を見つけ出さなければならない。

参考文献

原典の書誌情報。(訳者名訳, 翻訳の出版年, 『訳書のタイトル』出版社名.)

Joseph E. Uscinski, 2020, "Conspiracy Theories: A Primer, Rowman" & Littlefield Publishers
(北村京子, 2022 『陰謀論入門: 誰が、なぜ信じるのか?』作品社)

Jameson, Fredric. Ideologies of theory. Verso Books, 2009.

Lee McIntyre, 2018, "Post-Truth", MIT-Press(大橋、居村、大崎、2020, 『ポストトゥルース』人文書院)

Karen M. Douglas, Robbie M. Sutton, and Aleksandra Cichocka, 2017, "The Psychology of Conspiracy Theories", Current Directions in Psychological Science 2017, Vol. 26(6) 538–542

Hydrisko, John, "On Narrative Approaches to Conspiracy Theory" (2021). Honors Theses. 1684. https://egrove.olemiss.edu/hon_thesis/1684

Vonnegut, Kurt. "Dispatch from a Man without a Country." 2006. In How to Lose a War, edited by Ken Coates, 17-27. Nottingham, England: Spokesman Books

Leone, Massimo, Madison Mari-Liis, and Ventsel Andreas. "Semiotic approaches to conspiracy theories." The Routledge Handbook of Conspiracy Studies. Routledge, 2020. 43-55.

Raab, Marius H., et al. "Thirty shades of truth: conspiracy theories as stories of individuation, not of pathological delusion." Frontiers in psychology 4 (2013): 406.

Greimas, Algirdas Julien. "Sémantique structurale" Paris : Larousse (1966).(田島・鳥居訳, 1988, 『構造意味論-方法の探究-』紀伊國屋書店.)

Greimas, Algirdas Julien. « Du sens. Essais sémiotiques » Editions du Seuil, 1970 (赤羽研三

-
- 訳, 1992『意味について』水声社)
- Propp, Vladimir. Morphology of the Folktale. University of Texas Press, 1968. (北岡・福田訳, 1987.『昔話の形態学』水声社,)
- Onodera, Susumu. "Greimas's actantial model and the cinderella story: The simplest way for the structural analysis of narratives." 人文社会論叢. 人文科学篇 24 (2010): 13-24.
- Saraswati, Ria. "GREIMAS'S ACTANTIAL MODEL IN THE HUNGER GAMES MOVIE." Akrab Juara: Jurnal Ilmu-ilmu Sosial 7.3 (2022): 314-321.
- Wang, Yong, and Carl W. Roberts. "Actantial analysis: Greimas's structural approach to the analysis of self-narratives." Narrative Inquiry 15.1 (2005): 51-74.
- 栗田英彦『マルクス主義的陰謀論の諸相-デリダ・ジェイムソン・太田龍-』(『怪異とナシヨナリズム』青弓社 2021年 p200-223)
- 栗田英彦『革命理論としての陰謀論』(『現代思想』2021年5月 p78-87)
- 栗田英彦『世界革命と陰謀論—太田龍の「辺境」の論理—』(『宗教と社会』2019年25巻 p.215-217)
- 齊藤竹善.(2023).『日本におけるレプティリアン陰謀論受容とその役割: 太田龍から神真都Qまで』. 都市文化研究, 25, 66-77.
- 高田明典.『物語構造分析の理論と技法: CM・アニメ・コミック分析を例として』(2010) 大学教育出版
- 土田知則, 神郡悦子, 青柳悦子& 伊藤直哉.『現代文学理論: テクスト・読み・世界』.(1996) 新曜社
- 太田龍.『マルクスを超えて』(1986).風濤社
- 太田龍, 柴谷篤弘『自然観の革命』(1980).現代書館
- 太田龍.『世界革命・革命児ゲバラ』(2011).面影橋出版
- 太田龍『アイヌ革命論-ユーカラ世界への<退却>』(1973)新泉社
- 太田龍『縄文日本文明一万五千年史序説』(2003)成甲書房
- 太田龍『自然観の革命』()
- 藤巻光浩(2022)「第5章 太田龍—ポスト新左翼の「革命」とアイヌ民族運動の胎動」日高勝之編『1970年代文化論』青弓社 144-168